様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２３８４

研究課題名（和文）教員を志望する高校生へのキャリア支援：学部教員養成以前の教職カリキュラムを考える

研究課題名（英文）Career support for high school students aspiring to become teachers

研究代表者
笠井　孝久（KASAI, TAKAHISA）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：４０３０２５１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、教員を目指す高校生へのキャリア支援の実態を調査し、大学での教員養成以前の育成カリキュラムの構築に役立つ知見を得ることを目的としている。
全国で実施されている教員を目指す高校生へのキャリア支援の取り組みの特徴や意義を考察したところ、これらの取り組みは高校、大学、教育委員会といった多様な主体により、それぞれの狙いに応じた方法で実施されていることがわかった。
また、千葉県の教員基礎コースに在籍する生徒および基礎コースに参加した後に千葉大学教育学部に入学した学生たちにインタビューからは、基礎コースでの経験が教員への志望を高めたり、大学での学びの基礎になっていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
“団塊”世代の教員の退職や教員志望者数の減少といった状況の中で、教員を志望する高校生へのキャリア支援の取り組みがが全国各地で実施されている。
本研究では、現在行われている教員を志望する高校生を対象ととしたキャリア支援の取り組みの特徴や意義を検討するとともに、それらの取り組み（千葉県で行われている「教員基礎コース」）に参加している生徒、および教員基礎コース等を終了し、千葉大学教育学部に入学した学生へのインタビュー調査から、教員を志望する高校生に対するキャリア支援の意義や効果を明らかにし、大学での教員養成以前の教員育成プログラムの構築に資するに知見を提供した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate details of career support for high school students aspirating to become teachers, and get knowledge that will be useful in constructing a training curriculum prior to study at universities.
As a result, it was found that these supports were implemented by various organizers, such as high schools, universities and school boards, in a way according to their purpose.
In addition, from interviews with students perticipating in one of these supports(Kyouin-kiso course) and university students who graduated in Kyouin-kiso course, it was found that the experience in Kyouin-kiso course increased their desire to become a teacher, become the basis for their learning at university.

研究分野：生徒指導、教育相談、進路指導

キーワード：高校生　キャリア支援　教員養成

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　C－１９、F－１９、Z－１９

１．研究開始当初の背景

少子化に伴う高等学校の再編の中で、高等学校段階における教員養成（教員を志望する高校生へのキャリア支援）をめぐる動きが広がりつつある。その背景には、都市部を中心とした教員の大量退職、大量採用という入れ替え現象や教員採用試験の倍率低下傾向など、教員養成及び教員採用をめぐる新たな動向がある。

このような取り組みの先駆けとなったのは、平成 18 年度の奈良県教育委員会による教育コース（高田高校、平城高校）と平成 19 年度の京都市教育委員会による教育みらい科（塔南高校）の開設である。これら三校には教員養成課程を担当する大学教員（京都教育大学等）が具体的な授業に関わっており、すでに教員として活躍する卒業生を輩出している。その後も「教育」関連コースをもつ高校が全国各地で開設され、志の高い人材を早期に確保しようとする動きが広がっている。

千葉県教育委員会も、平成 26 年度より学校改革推進プラン（魅力ある県立学校づくりの推進）の一貫として県立千葉女子高校と安房高校に教員を目指す高校生のための教員基礎コースを開設し、今年４年目を迎える。　千葉大学教育学部は千葉県教育委員会からの要請をうけ、準備段階から千葉女子高校及び安房高校との協力体制（地域貢献プロジェクト「教員を目指す高校生への支援」）を築いてきた。2014 度からの講師派遣に加え、一昨年(2015)度から両校コースに在籍する２年生の交流学習会を提案して実施、報告書を作成するなど、両校コースのカリキュラム内容に積極的に関わってきた。平成 30 年からは、さらに２校（県立君津高校、我孫子高校）が加わることが決定している。

２．研究の目的

本研究では、他県での実践の結果を踏まえながら、教員を志望する高校生へのキャリア支援、すなわち学部における教員養成以前の育成カリキュラムのあり方を検討し、その意義と効果を検証することを第１の目的とする

さらに、学部における教員養成以前の育成カリキュラムの検討（見直しと改善）を踏まえて、千葉大学教育学部の教職カリキュラム（とりわけ教職に関する科目：現代教職論等）における内容を再検討し、高校－大学という７年間を視野に入れた質の高い教員養成課程のあり方について考察する。

具体的には、以下の３点について検討する。

①教員を志望する高校生へのキャリア支援の実践例から、この取り組みの意義や効果について検討する。教員を志望する高校生のキャリア支援について、先進高及び現在実施している取り組み（高田高校、平城高校、塔南高校、大阪教育大学・府立高校教職コンソーシアム、奈良県次世代教員養成塾、香川県立坂出高校、千葉県立高校の教員基礎コース等）の実態（具体的にどのようなカリキュラムが実施されているのか、実施上の課題など）を訪問調査によって把握し、卒業生の進路等の実績を収集する。また、関係校を交えてシンポジウムを行い、情報の共通理解、協議を行う。

②千葉県内の協力校（高校改革推進プラン協力校：教員基礎コース等設置校）の生徒ならびに教員基礎コース等を修了し、千葉大学教育学部へ入学した学生に対して、アンケートや面接（聞き取り）調査を行い、教員を志望する高校生に対するキャリア支援（高校段階からの教員養成）の意義や効果に関する情報を収集し、育成カリキュラムのあり方を検討（見直しと改善）する知見を得る。

③上記の検討結果を踏まえ、高校－大学という７年間を視野に入れて、千葉大学教育学部の教職カリキュラム、とりわけ教職に関する科目である現代教職論（１年前期必修）

等の内容の検討（見直し、修正）に資する知見を得る。

３．研究の方法

①教員を志望する高校生のキャリア支援の実態調査

教員を志望する高校生へのキャリア支援を行なっている先進高、関係機関を訪問し、取り組みの内容や方法、成果等について面接調査を行った。

〔平成 30 年度〕実態調査：大阪教育大学(６月）京都市立塔南高等学校(11 月)、

〔令和元年度〕実態調査：奈良県立高田高等学校(７月)、奈良県立教育研究所(７月）

シンポジウム開催(11 月)

（令和２～３年度は、コロナ禍により、計画していた聞き取り調査ができなかった。）

〔令和４年度〕実態調査：香川県立坂出高等学校(８月)、調査のまとめ、

②教員基礎コースに参加している生徒ならびに修了生への調査

千葉県立高校の教員基礎コース等に参加している生徒を対象にアンケート及び面接調査を行い、教員を志望する高校生に対するキャリア支援の意義、効果等についての認識等の情報を収集した。また、教員基礎コース等を修了し、千葉大学教育学部に入学した学生に対する面接調査を行い、卒業生の観点からの教員を志す高校生へのキャリア支援の意義や効果について情報を収集した（追跡調査)。

〔平成 30 年～令和４年度〕卒業生に対する面接（聞き取り）調査（各年度１～２月）

〔令和４年度〕教員基礎コース等に参加している生徒に対するアンケート調査（11 月)、

面接（聞き取り）調査(令和５年１月)、研究のまとめ

③教員基礎コース等での学習経験を想定した教員養成カリキュラムの検討

高校－大学という７年間を視野に入れて、千葉大学教育学部の教職カリキュラム、とりわけ教職に関する科目である現代教職論（１年前期必修)、及び教職実践演習（４年後期必修）の内容を見直すことによって、教員養成カリキュラム全体に資する。

〔平成 30～令和４年度〕高校生の育成カリキュラム開発と学部教職科目の見直し、

教員基礎コース等交流学習会・関係者情報交換会の実施（毎年 11 月に実施。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和２年度は協力校教員、教育委員会、大学関係者が参加する関係者情報交換会のみ実施、令和３年度はオンラインで実施)。

〔令和４年度〕研究のまとめ －教員養成カリキュラ（教職科目）への提言-

４．研究成果

①教員を志望する高校生のキャリア支援の実態調査

全国で行われている、教員を志望する高校生へのキャリア支援の取り組みは、高校、大学、教育委員会などが主体となって実施されている。それぞれの実施主体によって、支援内容、方法には違いがある。

【高校が主体となった取り組み】高校が主体となる取り組みとして、奈良県立高田高等学校教育アンビシャスコース、京都市立塔南高等学校教育みらい科、香川県立坂出高等学校教育創造コース、千葉県立高校の教員基礎コース等（県立安房高等学校、千葉女子高等学校、成東高等学校、君津高等学校、我孫子高等学校）から、聞き取り調査等を行い、コース設置の目的や教育課程等に関するデータを収集した。それぞれの学校の狙いによって、違いが見られた。

例えば、京都市立塔南高等学校教育みらい科は全国で唯一の教育系の専門学科である。入試の段階で教育みらい科を受験し、３年間同じクラスで学校生活を送る。クラスの皆が教職に関心をもち、教職についての専門的な学びがそれ以外の学校生活と繋がって相乗効果を生む部分がある。

一方、他の高校は皆、コース制としている。普通科に合格した生徒の中から、希望者を募る。「コース」でクラスを構成するのではなく、受講者は普段は自分のクラスで生活し、決められた

時間に集まり、教職に関する学習を行う。香川県立坂出高等学校教育創造コースは、上記の中間的な体制をとっている。普通科の選抜に合格した後に、「文理」、「普通」、「教育創造」の３コースの希望をとり、「教育創造コース」を希望した生徒を中心に１クラスを構成する。さらに、さらに２年次に進学する際に、コース変更も可能である。

また、カリキュラムにおいても、それぞれの学校の特色がある。１年次～２年次の２年間でコースの活動を行う高校、２年次～３年次で行う高校、

学習内容においては、教職や学校、教育に関する入門的な内容、大学教員の講義、課題研究などが共通して行われている。とりわけ、多くの高校で実習が重視されている状況が伺えた。

【大学が主体となった取り組み】

大学が主体となって教員を目指す高校生のキャリア支援の取り組みとして、大阪教育大学の「教師にまっすぐ」についてデータを収集した。府立高校で構成されている「大阪府立高校教職コンソーシアム」と連携協力のもと、大阪教育大学での講義、コンソーシアム参加校での出前授業、オープンキャンパスでの大学教員・大学生との交流などを実施している。教職について学ぶことに加え、関係大学のキャンパスライフや教員養成の取り組みをを紹介し、教職や教員養成系学部の魅力を伝えている。

【教育委員会が主体となった取り組み】

教育委員会が主体となる取り組みとして、奈良県立教育研究所の「次世代教師養成塾」についてデータを収集した。このプログラムは、奈良県の教員を志望する高校生に対して、高校時代（前期プログラム）、大学時代（後期プログラム）を通して教員としての資質を育成しようと試みている。長期にわたる継続的、系統的なプログラム内容を構築し、高校時代から教員採用までをサポートする積極的な取りくみである。

②教員基礎コースに参加している生徒ならびに修了生への調査

a) 教員基礎コースに参加している生徒へのアンケート調査からは、教員基礎コースの活動でよかった点として、「学校での実習」、「実際の教育現場に触れられたこと」などがあげられた。

b) 教員基礎コースに参加している生徒へのインタビュー調査では、実習、課題研究やプレゼンテーションがよい経験になっていることがわかった。教員基礎コースには、教員志望が固まっていない生徒も受講している場合があるが、そういった生徒にとっても、これらの授業はためになっているという。特別支援学校での実習に大きな影響を受ける生徒が少なくない。受講者にとって、教員基礎コースでの学習が自分の適性や進路を考える貴重な経験になっていることがわかった。

c) 教員基礎コース等を修了し、教育学部に入学した学生へのインタビュー調査からは、高校時代の学びが大学での学びの基盤になっていることが示唆された。高校時代に学んだ内容がそのまま役にたつわけではないが、大学での学び直しにより、一度話を聞いているので理解がしやすかったり、当時の理解と今の理解との違い（より深い理解）に気づいたりする経験になっている。また、高校時代の経験、特に実習を通して、子どもを見る視点や関わり方を考えた経験は、教師としての姿勢や児童生徒を見る視点に役立っていると考えられている。

インタビューをしていて、高校時代に教員基礎コース等を経験して入学してきた学生たちは進路に対するブレが少ないと感じる。自分の適性や進路についての理解が、高校時代に具体性を持って行われてきたためだと推察される。

③教員基礎コース等での学習経験を想定した教員養成カリキュラムの検討

教職を目指す高校生へのキャリア支援の実態調査から、高校時代（大学における教員養成以前）からの教員養成のあり方について、以下の点が示唆される。

・高校生の時期に教職について学ぶ機会は、受講する生徒のキャリア支援において、非常に有意

義である。教職についての関心、意欲を持続、向上する効果がある。教職という進路を選択しない生徒にとっても、自己の関心や適性を知るよい機会となる。

・大学で１年次の最初に学ぶ「教職概論」などの授業内容は、教員基礎コース等で学ぶ内容と重なる部分も多い。大学との連携、条件整備によって、高校時代の活動を大学の授業の単位として認めることも可能であろう。一方、インタビューからは、「同じような内容を学習しても、高校時代の学びと大学での学びには違いがある」、「学び直しによって、再確認ができた」との意見もあり、カリキュラムの乗り入れ等には議論が必要である。

・教員基礎コース等を修了した学生は、実習を経験し、児童生徒理解や教師の視点や役割について学んでいるので、大学に入学して初めて教育現場に関わる学生と比べて、実習やボランティア等に対して、ある程度の準備ができているため、大学入学後の実習やボランティアにおいて、より積極的に児童生徒に関与できるような機会が提供できるのではないか。

・高校時代の教職に関するキャリア支援には、大学入試というハードルがある。高校時代の教職への意欲、関心を持続させながら、大学へとつなげる方策を考える必要がある。

高校時代の教職について学ぶ経験を踏まえて、教職を選択した学生に入学してもらうことは、大学に入学してから「自分が想像していたものと違う」といったミスマッチを防ぐ意味でも、大学にとっても意味がある。大学側もやる気のある学生を入学させるために、高校時代の教職に関するキャリア支援活動と、さらなる連携、協力が必要となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 笠井　孝久	４．巻 26
２．論文標題 「教員基礎コース」に対する高校生の認識	５．発行年 2023年
３．雑誌名 千葉大学教育実践研究	６．最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S27588025-26-P11	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 小野善郎、保坂　亨、笠井孝久　他	４．発行年 2023年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 300
３．書名 移行支援としての高校教育３	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	土田　雄一 (Tsuchida Yuuichi) (10400805)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	梅田　克樹 (Umeda Katsuki) (20344533)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	保坂　亨 (Hosaka Tohru) (30173579)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	重栖　聡司 (Omosu Satoshi) (40757390)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	渡邉　健二 (Watanabe Kenji) (50786845)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	真田　清貴 (Sanada Kiyotaka) (90786831)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	伊藤　英希 (Ito Hideki) (80827767)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	吉田　浩 (Yoshida Hiroshi) (30845813)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	大野　英彦 (Ohno Hidehiko) (60891091)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	伊藤　裕志 (Ito Hiroshi) (50913175)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	土屋　明子 (Tsuchiya Akiko) (70913177)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森　美香 (Mori Mika) (70966225)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	國吉　浩二 (Kuniyoshi Kouji) (60968593)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関